

病害虫発生予察情報（8月予報）

令和元年7月24日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
イネ	葉いもち・穂いもち	発生量：やや少 (葉いもち発病株率 1.3%) (穂いもち発病株率 0.5%)	7月上中旬葉いもち発生量：少(－) (但し、一部ほ場で多) 気象予報：気温：低い(＋) 降水量：並～多い(±～＋)
	紋枯病	発生量：少 (発病株率 7.5%)	7月上中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～多い(±～＋)
	ごま葉枯病	発生量：少 (発病株率 12.2%)	7月上中旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～多い(±～＋)
	稲こうじ病	発生量：やや少 (発病株率 0.6%)	昨年8月発生量：少(発生なし)(－) 昨年9月発生量：少(－) 気象予報：気温：低い(＋) 降水量：並～多い(±～＋)
	斑点米カメムシ類	発生量：少	7月上中旬発生量：少(－) 7月予察灯誘殺数：並(±) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～多い(－)
	コブノメイガ	発生量：並 (被害株率 2.6%)	7月上中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～多い(±)
	イチモンジセセリ (イネツトムシ)	発生量：少 (25株あたり寄生数 0.7頭)	7月上中旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～多い(±)
サツマイモ	ナカジロシタバ	発生量：少 (寄生虫数 0.5頭/m ²)	7月上旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～多い(±)
	イモキバガ (イモコガ)	発生量：少 (巻葉数 18.0葉/m ²)	7月上旬発生量：少(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～多い(±)
	エビガラスズメ	発生量：少 (寄生虫数 0.00頭/m ²)	7月上旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～多い(±)

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均年値)	予報の根拠
ウンシュウ ミカン	黒点病	発生量：並 (発病度0.4)	7月上中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～多い(±～+)
	ミカンハダニ	発生量：少 (寄生葉率8.7%)	7月上中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～多い(-)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：少 (寄生果率0.1%)	7月上中旬発生量：やや少(-) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～多い(-)
中晩柑類	かいよう病	発生量：やや多 (発病度(果)0.4)	7月上中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：低い(+) 降水量：並～多い(±～+)
ナシ	ハダニ類	発生量：少	7月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～多い(-)
	ナシヒメシンクイ	発生量：並	7月中旬発生量：並(±) フェロモン誘殺数：多(+) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～多い(-)
カキ	フジコナ カイガラムシ	発生量：少 (寄生果率2.1%)	7月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～多い(-)
	ハマキムシ類	発生量：少	7月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～多い(-)
果樹全般	カメムシ類	発生量：少	7月中旬誘殺数：少(-) ヒノキ毬果吸汁痕数：少(-) 気象予報：気温：低い(-)
チャ	炭疽病	発生量：並 (病葉数 20.6 葉/1.25m ²)	7月上中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(+) 降水量：並～多い(±～+)
	輪斑病	発生量：並 (病葉数 1.9 葉/1.25m ²)	7月上中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(+)
	新梢枯死症	発生量：並 (発症枝数 7.4 枝/1.25m ²)	7月上中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：低い(+)
	チャハマキ	発生量：少 (寄生虫数 1.7 頭/1.25m ²) 発生時期：並	7月上中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(±) 降水量：並～多い(±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：少 (寄生虫数 1.8 頭/1.25m ²) 発生時期：並	7月上中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(±) 降水量：並～多い(±)
	チャノホソガ	発生量：少 (巻葉数 3.6 葉/1.25m ²)	7月上中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(±) 降水量：並～多い(±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：少 (叩き落とし虫数 16.8 頭/4カ所)	7月上中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(±) 降水量：並～多い(±)

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
チャ	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：並 (叩き落とし虫数 1.5 頭/4 カ所)	7月上中旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気 温：低い (±) 降水量：並～多い (±)
	ヨモギエダシャク	発生量：やや多 (叩き落とし虫数 0.1 頭/4 カ所)	7月上中旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気 温：低い (±) 降水量：並～多い (±)
キク (施設)	白さび病	発生量：並	7月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気 温：低い (±) 降水量：並～多い (±～+)
	黒斑・褐斑病	発生量：並	7月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気 温：低い (±) 降水量：並～多い (±～+)
	えそ病 (トマト黄化えそ ウイルス: TSWV)	発生量：やや多	7月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気 温：低い (+)
	アザミウマ類	発生量：並	7月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気 温：低い (±)
作物全般	ハスモンヨトウ	発生量：並	フェロモン誘殺数：並～やや多 (±～+) 気象予報：気 温：低い (-) 降水量：並～多い (±)
	オオタバコガ	発生量：やや少	フェロモン誘殺数：並 (±) 気象予報：気 温：低い (-) 降水量：並～多い (±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく過去 10 年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のごく過去 10 年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1か月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索!



静岡県農薬安全使用指針
・農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【イネ】

<生育の概況等>

巡回時の生育調査（下表、調査期間：7月3日～17日）の結果、草丈は平年よりやや低く、茎数は平年並み～やや少なく、葉色は平年並であった。病害虫防除員からのアンケート調査によれば、生育は平年並～やや遅い傾向にある。

7月上中旬のイネ生育調査結果

	田方 平坦地	東部 高冷地	志太榛原	中遠・西部 (普通期)	中遠 (早期)
草丈 (cm)	51.5 (58)	62.6 (71.3)	66.1 (67)	56.9 (65.3)	69.9 (83.3)
茎数 (本)	20.2 (24.5)	23.5 (22.7)	23.7 (23.5)	17 (22.6)	22.6 (23.3)
葉色 (指数1-7)	4.8 (4.6)	4.3 (4.3)	4.5 (4.2)	4.4 (4.2)	4.5 (4.2)

()内は平年

●葉いもち・穂いもち

予報の根拠

- 7月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.92%（平年1.62%）となったが、これは中遠地域の1ほ場で多発していたため（発病株率84%）であり、この1ほ場を除いた平均発病株率は0.17%と平年より少なかった。
- 1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（感染好適条件：気温15℃～25℃、葉面湿潤時間10時間以上、前5日間の平均気温が20℃～25℃を全て満たす時）。

防除対策

- 育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した曇雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- 上位1～3葉に病斑が見られる場合は、適期（穂ばらみ期～穂揃期）に必ず防除を実施する。特に、急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- 常発地では薬剤の予防散布を行う。
- 本県ではMBI-D剤（「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」を含む剤）耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県ではQoI剤（「アミスター」または「嵐」を含む剤）耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照）。

●紋枯病

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.08%（平年1.0%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より低いため、本病の発生をあまり助長しない（本病原菌は生育適温28～32℃と高温を好む）。

防除対策

- ・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生がみられたほ場では発生しやすい。そのようなほ場では発生に注意し、発生が見られた場合はすみやかに薬剤防除を行う。
- ・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため、そのようなほ場では今後の発生に注意する。

●ごま葉枯病

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.17%（平年2.4%）と平年より少なかった。
- ・出穂期以降登熟期までの高温は、イネの老化と病原菌の活動を促すため、本病の発生が多くなる（病原菌の生育適温：25～30℃）。1か月予報では、降水量は平年並～多いが、気温は平年より低いため、本病の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・肥料切れにより発生が助長されるため、穂肥を適切に施用する。
- ・出穂期以降に高温・多湿が続いた場合には、葉の斑点のみならず穂枯れを起こすので、葉に病斑が見られる場合は穂ばらみ期～穂揃期にかけて薬剤散布を行う。

●稲こうじ病

予報の根拠

- ・昨年8月の巡回調査では、平均発病株率は0.17%（平年0.6%）と平年より少ない発生であった。昨年9月の巡回調査においても、平均発病株率は1.16%（平年2.0%）と平年より少ない発生であった。東部高冷地や田方平坦地で発生が見られた。
- ・穂ばらみ期頃の低温・多雨により発生が助長される。1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。
- ・本病は収穫時に落下した病粒に含まれる多量の厚壁胞子が土壌中に残り、翌年の伝染源となる。このため、常発ほ場では注意が必要である。

防除対策

- ・本病の薬剤防除は予防散布が基本であり、適期は穂ばらみ期頃である。
- ・常発ほ場では、次年以降も適期に薬剤防除を実施する。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

予報の根拠

- ・ 7月上中旬の水田周辺における雑草のすくい取り調査では、県平均捕獲数は7.1頭/30回振り（平成21.4頭/30回振り）と平成より少ない発生であり、全調査地点中52%（平成72%）の調査地点から斑点米カメムシ類が捕獲された。
- ・ 周辺雑草から捕獲したカメムシ類のうち、アカスジカスミカメが全捕獲数の84%、アカヒゲホソミドリカスミカメが同12%を占めた。その他、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシなどが捕獲された。
- ・ 7月第2半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、アカスジカスミカメとアカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺数は平成並で推移している。
- ・ 1か月予報では、気温は平成より低く、降水量は平成並～多いため、本虫の増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・ 斑点米カメムシ類はイネ科やカヤツリグサ科雑草の種子で増殖するため、水田周囲の雑草を除草する。ただし、水稲の出穂間際の除草はカメムシ類の本田侵入を助長する可能性があるため、出穂10日前までに除草を終了する。
- ・ 出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。特に出穂期が周辺より早い水田はカメムシ類が集中するため、注意を要する。
- ・ 穂揃期（成虫侵入期）とその7～10日後（幼虫ふ化期）の2回薬剤散布を行うと効果が高い。
- ・ 粒剤は出穂期に散布する。
- ・ 農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稲のカメムシを防除する時期に多く、水稲のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報共有を行う等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は農林水産省ホームページ（http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_mitubati/honeybee_survey.html）を参照すること。

7月の畦畔・雑草地における斑点米カメムシ類の捕獲頭数（頭/30回振）

	田方平坦地	東部高冷地	志太榛原	中遠・西部 普通期	中遠 早期	県平均
本年度	0.4	0.1	11.9	10.1	12.9	7.1
平成	8.4	2.3	27.8	33.4	35.5	21.4

●コブノメイガ

- ・ 7月上中旬の巡回調査では、平均被害株率は1.2%（平成1.1%）と平成並の発生であった。ただし、中遠及び志太榛原地域からは、多発による被害の問い合わせが多いため注意を要する。
- ・ 1か月予報では、気温は平成より低く、降水量は平成並～多いため、本種の増殖を特には助長しない。
- ・ 普通期栽培では出穂前に加害されると登熟歩合が低下するので、8月上～中旬に成幼虫の発生を確認する。上位葉を幼虫が食害している場合は直ちに薬剤を散布する。成虫が確認された場合は5～7日後に薬剤を散布する。

●イチモンジセセリ（イネツトムシ）

- ・ 7月上中旬の巡回調査では本種の寄生はみられなかった（平年 0.04 頭/25 株）。
- ・ 普通期栽培で葉色の濃い水田では被害が集中するので、葉巻の発生に注意し、葉巻内に幼虫が見られる場合は薬剤防除を行う。

<その他の病害虫>

●トビイロウンカ

- ・ 7月上中旬の巡回調査では平均寄生数 0.02 頭/株（平年発生なし）であり、平年より多かった。
- ・ 7月第2半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、トビイロウンカの誘殺は確認されていない。
- ・ 例年、8月以降に発生量が増加する。8～9月に高温が継続する場合は急増し、9月以降に坪枯れを起こすことがあるため、注意が必要である。
- ・ 葉色に注意し、水田内の一部が坪状に黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

【サツマイモ】

<生育の概況等>

多雨及び日照不足により、生育は平年に比べ7～14日遅れている。

●ナカジロシタバ

予報の根拠

- ・ 7月上旬に行った巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生幼虫数 0.3 頭/m²）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

- ・ 幼虫は齢期が進むと葉を食い尽くすので、例年発生するほ場では注意が必要である。
- ・ 幼虫が多数見られるようであれば直ちに薬剤防除を行う。

●イモキバガ（イモコガ）

予報の根拠

- ・ 7月上旬に行った巡回調査では、平均巻葉数は 0.5 葉/m²（平年 2.8 葉/m²）と平年に比べ少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

- ・ 例年、8月は葉の繁茂に伴い巻葉数が増加する。多発生のは場では、被害が拡大する前に防除を行う。

●エビガラスズメ

予報の根拠

- ・ 7月上旬に行った巡回調査では、発生は認められなかった（平年 0.04 頭/m²）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本種の発生を助長しない。

防除対策

- ・ 中～老齢幼虫は1頭当たりの食害量が多いため、若齢幼虫のうちに防除を行う。

【ウンシュウミカン】

＜生育の概況等＞

生育は平年並の地域が多いが、4～7日程度遅い地域もある。着果量はやや少ない。

●黒点病

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、果実の発病度は0.14（平年0.17）と平年並の発生であった。
- ・本病は風雨によって伝染するため多雨は発生を助長する。1か月予報では、気温は平年より低い、降水量は平年並～多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・薬剤散布は前回の散布日から25～30日または累積降雨量が250～300mmを目安にして防除を行う。
- ・アメダスの気象データを用いたシミュレーションによる要防除時期は、気象が今後平年並に推移した場合、7月10日に防除を行った園では8月中旬～下旬、7月15日に防除を行った園では8月下旬～9月中旬、7月20日に防除を行った園では9月上旬～下旬となる（累積降雨量は地域によって異なるため、各地域における要防除時期の予想については病虫害防除所ホームページを参照）。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査における平均寄生葉率は4.7%（平年14.7%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報によると、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・夏期（7～8月）は天敵（カブリダニ類、ハネカクシ類、テントウムシ類）の発生が多くなるが、ミカンハダニが多発している園（葉あたり3頭を超える園地）では薬剤防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、本虫の平均寄生果率は0.1%（平年0.2%）と平年よりやや少なかった。果梗部の平均被害度は0.3（平年0.8）と平年より少なく、果頂部の被害は見られなかった（平年0.1）。
- ・1か月予報によると、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・アメダスの気象データを用いた予測では、今後気温が平年並で推移した場合、第5世代成虫の発生ピークは8月10～21日、第6世代成虫の発生ピークは8月28日～9月11日と予想される（発生ピーク時期は地域によって異なるため、各地域における成虫発生時期の予想については病虫害防除所ホームページを参照）。
- ・薬剤防除適期は各世代の飛来ピーク7日前～当日までである。各地域の発生ピークを参考に防除を行う。
- ・樹冠占有面積率60%以下の園地で、反射率90%以上の光反射シートマルチを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。

【中晩柑】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 7月上中旬の巡回調査では、葉の発病度は0.70（平年0.61）、果実の発病度は0.24（平年0.20）と平年並の発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病に対する薬剤散布は、予防散布に重点を置く。発生が見られる園地では感染の拡大を防ぐため降雨前の薬剤散布を行う。
- ・ 台風が襲来すると感染を著しく助長し、それ以前の発生量が少ない場合でも多発する恐れがある。降雨後に散布しても、すでに感染した組織内の病原菌にはほとんど効果はないので、気象情報とほ場の発生状況に注意して降雨前の予防散布を行う。

【ナシ】

<生育の概況等>

生育は平年並の地域が多いが、4～7日程度遅い地域もある。果実肥大は地域により異なり、平年並～平年より悪い地域がある。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では平均寄生葉率は1.9%（平年3.1%）で平年より少ない発生であった。
- ・ 1か月予報によると、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 発生園では収穫前日数に注意して防除を行う。
- ・ 葉当たり雌成虫密度1～2頭（寄生葉率20～40%）が防除の目安である。この時期は増殖が速いので園内の発生状況をよく観察する。

●ナシヒメシンクイ

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では被害果は確認されず、ほぼ平年並であった（平年被害果率0.02%）。
- ・ 浜松市内のフェロモントラップの誘殺数は、平年に比べて多く推移している。
- ・ 1か月予報によると、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 成虫の発生は例年8月上旬～中旬にかけて多くなるため、無袋栽培園では収穫時期に注意し、防除を行う（誘殺データは病害虫防除所ホームページを参照）。

【カキ】

<生育の概況等>

生育は平年並の地域が多いが、4～7日程度遅い地域もある。着果量は平年並～やや少ない。

●フジコナカイガラムシ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では平均寄生果率は0.3%（平年1.2%）で平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報によると、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・近年、発生が増加傾向にあることから、発生がみられるほ場では直ちに防除する。本種は果実とヘタの間の薬剤が届きにくい所に寄生しているので散布を丁寧に行う。

●ハマキムシ類（チャハマキ、チャノコカクモンハマキ）

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では平均被害葉率は0.1%（平年1.5%）で平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報によると、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・両種の第2世代成虫発生時期は8月上旬～中旬まで長くなることが多い。地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意し適期に防除する（誘殺データは病虫害防除所ホームページを参照）。

【果樹全般】

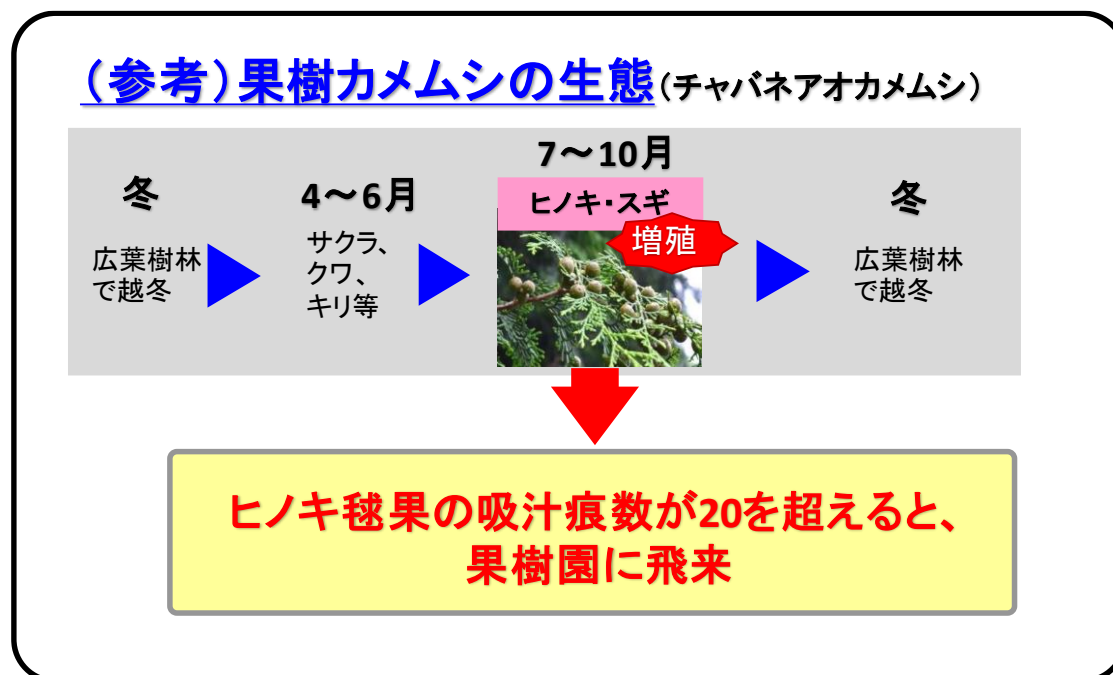
●カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・7月第1～4半旬の予察灯における合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシは15.3頭/箇所（平年241.9頭/箇所）、ツヤアオカメムシは10.7頭/箇所（平年34.5頭/箇所）と平年より少なかった。県内6カ所のフェロモントラップにおける7月第1～3半旬の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが116.5頭/箇所（平年405.9頭）と平年より少なく、ツヤアオカメムシは10.8頭/箇所（平年2.8頭）と平年より多い発生であった。
- ・繁殖場所であるスギ・ヒノキにおける7月上中旬のカメムシ類の平均寄生数は、10結果枝あたり3.5頭（平年1.9頭）と平年より多かった。
- ・カメムシ類の好適な餌であるヒノキ毬果において、毬果1個あたりのカメムシ類による吸汁痕数が20を超えると、スギ・ヒノキからカメムシ類が離脱し餌を求めて果樹園へ飛来する（下図参照）。7月の毬果の吸汁痕数は平均0.3（平年1.2）と平年より少なく、8月は果樹園への飛来は少ないと考えられる。
- ・7月上中旬のスギ・ヒノキの毬果量調査では、平均結果量指数が3.5（平年4.3）と平年よりやや少なかった。

防除対策

- ・フェロモントラップ及び予察灯による誘殺数は、病虫害防除所ホームページを参照する。
- ・スギ・ヒノキ林付近の果樹園では飛来しやすいため、ほ場の発生状況をよく観察し、発生が見られれば防除を行う。



【チャ】

<生育の概況等>

7月上中旬の巡回調査時では、二番茶の摘採後に葉をわずかに残す程度に浅刈りを行った茶園が多く、その後の芽の生育も茶園によりばらつきがみられた。また、防除員からの情報では生育は平年並~7日遅れている。

●炭疽病

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、平均7.1葉/1.25㎡(平年13.0葉/1.25㎡)の発生であり、平年より少なかった。梅雨入り以降、降雨が多いにもかかわらず、平年より発病が少なかった原因として、浅刈りや更新が行なわれたほ場が多く、本病に感受性の高い生育ステージ(萌芽~2葉期)が、多雨時期に重ならなかったためと考えられる。したがって、従来通りの時期に三番茶を収穫するつもりで栽培管理をしてきたほ場での発生は多かった。
- ・本病の感染には新芽生育時に10時間以上の濡れが必要である。1か月予報では気温が低く、降水量は並~多いため、本病の発生を助長する(分生子の発芽適温22~27℃)。

防除対策

- ・新芽開葉期に半日以上続く降雨があった場合は、早めに防除を行う。なお、萌芽期~一葉開葉期には予防剤(ダコニール1000、フロンサイドSCなど)を使用することでDMI剤の連用を可能な限り避ける。

●輪斑病

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、平均14.9葉/1.25㎡（平年22.1葉/1.25㎡）の発生であり、平年より少なかった。これは、日照不足が続き、本病の発生に必要な25℃以上の高温に達する日数が少なかったためと考えられる。
- ・本病の発病は25℃以上の高い気温が好適である。1か月予報では気温が低いと予想されているが、最高気温は連日25度以上に達すると考えられることから、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口が発病に必要なため、常発園では、整枝等の作業を行った際には、翌日までに薬剤による防除を行う。

●新梢枯死症

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、平均2.2枝/1.25㎡（平年2.5枝/1.25㎡）と平年並みの発生であった。なお、本症状の原因として輪斑病菌が関与しているものは半数程度であることが判明しており、残りは多雨による水腐れや高温等による生理的な要因と考えられる。7月巡回時の発生は多雨が関与したものと考えられる。
- ・1か月予報では、気温が低いと予想されているが、最高気温は連日25度以上に達すると考えられることから、本症の発生を助長する。

防除対策

- ・三番茶を摘採しない園では、三番茶芽の萌芽期から生育期に、三番茶を摘採する園では、秋芽の萌芽期から生育期に、2回程度薬剤を散布する。なお、QoI剤（商品名：アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブル、フリントフロアブル25、ファンタジスタ顆粒水和剤、スクレアフロアブル）は、耐性菌が発生しやすいので同一薬剤として扱い、連用を避ける。

●チャハマキ、チャノココクモンハマキ

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、平均寄生虫数はチャハマキが0.6頭/1.25㎡（平年2.1頭/1.25㎡）、チャノココクモンハマキが0.8頭/1.25㎡（平年1.6頭/1.25㎡）で、両種ともに平年に比べ少発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。
- ・本年は第1世代成虫発生時期が平年並～やや早まった。このため、第2世代成虫発生盛期は8月上旬と予想され、第3世代幼虫を対象とした防除時期は8月上旬から中旬になると予想される。

防除対策

- ・地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意して適期防除を行う。なお成虫の誘殺数データは病害虫防除所ホームページで提供している。
- ・成虫活性のある薬剤（サムコルやディアナ）を使用する場合は、8月第1半旬頃に、慣行の幼虫期防除では8月第2～3半旬頃が防除適期と考えられる。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.3葉/1.25 m²（平年1.1葉/1.25 m²）で、平年に比べ少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。
- ・二番茶後に浅刈りした茶園が多く、そのような茶園では新芽の生育時期が例年とは異なる。そのため、地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移に注意し、成虫の発生盛期と新芽の生育時期が合致する場合は、新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは病害虫防除所ホームページで提供している。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は8.0頭/4カ所（平年14.0頭/4カ所）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年、8月の新芽生育期は発生が増加するので、新芽の萌芽から開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に浅刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常茶園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽萌芽から生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は4.5頭/4カ所（平年2.8頭/4カ所）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年、8月の新芽生育期は発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に浅刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常茶園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽開葉期に防除を実施する。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.12頭/4カ所（平年0.08頭/4カ所）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 平年では、8月後半になると予察灯への成虫誘殺数が増加する。茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

<その他の病害虫>

●もち病

- ・ 7月上中旬の巡回調査では、平均発病葉率が18.1%（平年8.0%）と平年の2倍以上であった。これは梅雨入り以降の多雨が原因と考えられる。本病は、梅雨明け以降に発生が急減するため、梅雨明けが例年通りの場合は防除の必要が無い。ただし、梅雨明けが大幅に遅れた場合や、8月も日照不足が続く場合には、今後とも発生が続くため、防除が必要となる。なお、萌芽初期から散布を行えば、無機銅剤等の予防剤でも高い防除効果を得ることが出来るため、DMI剤に頼りすぎないようにする。

●カンザワハダニ

- ・ 7月上中旬の巡回調査では、摘採面における平均寄生葉率は1.5%（平年0.2%）と平年よりも高かった。1か月予報では、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。
- ・ 例年、8月は特に防除の必要はないが、被害が目立つ場合には早めに防除する。

●チャトゲコナジラミ

- ・ 7月上中旬の巡回調査では、成虫が盛んに発生している茶園が散見され、発生時期は平年並～やや遅かった。
- ・ 幼虫は裾部の葉裏に多く生息するので、防除の前に裾刈りを行い、幼虫の寄生している葉を枯らす（幼虫は移動できないため、寄生した葉が枯れると死亡する）。その後に薬剤散布を行うと、薬液が茶株の内側まで十分に付着し防除効果が高まる。

●マダラカサハラハムシ

- ・ 一番茶時期に被害が発生したような常発地域では、新成虫が発生する8月中下旬頃の防除を徹底する。薬剤は、コテツフロアブル等を使用する。詳細は、病害虫防除基準（HP：<http://www.s-boujo.jp/>）を参照する。

【イチゴ】

<その他の病害虫>

●炭疽病

- ・ 本病は比較的高温を好み、胞子が頭上灌水や雨滴の跳ね上がりにより飛散することから、高温・多湿条件下で多発する。一度発病してしまうと防除が困難なため、苗場では定期的な予防散布に努める。
- ・ 発病株は見つけ次第抜き取り、ほ場外に持ち出し処分する。移植時には感染苗を本ほへ持ちこまないように十分注意する。

●うどんこ病

- ・ 育苗中の防除を徹底する。また、現在、発病が見られないほ場も予防的に薬剤散布を行い、本ほへ持ちこまないようにする。

●コガネムシ類

- ・磐田市内における予察灯調査によると、ドウガネブイブイ及びアオドウガネは平年より少なく推移していた。
- ・発生がみられるほ場では、育苗期、定植時に薬剤散布を行う。定植時には根への幼虫の寄生に注意し、本ほへ幼虫を持ち込まないように注意する。

●ハダニ類

- ・発生がみられるほ場では、育苗期、定植時に薬剤散布を行う。定植前に葉の寄生に注意し、本ほへ持ち込まないように注意する。

【キク（施設）】

昨年度までは露地ギクと施設ギクで調査を行っていたが、今年度からは施設ギクのみで調査を行っている。

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●白さび病

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本病の発生をやや助長する（本病の発病適温 17℃前後）。

防除対策

- ・8月の高温は本病原菌の生育に適さないが、この時期に初期防除を怠ると、発病に好適な条件となる秋以降の防除が困難となるので、発生ほ場では初期防除に努める。
- ・発生ほ場、特に罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.6%であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本病の発生をやや助長する（生育適温：黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・多湿で発生が助長されるため、長雨が続く場合には発生に注意する。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●えそ病（トマト黄化えそウイルス：TSWV）

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.2%であった（平年値なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年より低いため、媒介虫であるミカンキイロアザミウマの増殖を助長する。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・ミカンキイロアザミウマの食害が認められる場合には、速やかに薬剤散布を実施する。

●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均被害株率は24.4%であった（平年値なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、クロゲハナアザミウマの増殖を特には助長しないが、ミカンキイロアザミウマの増殖を助長する。

防除対策

- ・開花期のキクは特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、蕾の膜割れ時から発生に注意する。

【作物全般】

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・フェロモントラップの調査によると、7月20日までの累積誘殺数は静岡市と磐田市で平年並だが、御前崎市で平年よりもやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本種の増殖を助長しない。

防除対策

- ・初期発生に注意し若齢のうちに防除を行う。施設栽培では施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。なお、成虫の誘殺数データは病害虫防除所ホームページで提供している。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・浜松市のキク産地におけるフェロモントラップの誘殺数は平年並で推移している。磐田市のフェロモントラップの誘殺数は平年並で推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～多いため、本種の増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・例年8～9月は発生が増加するため、芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和元年7月18日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 7月20日から8月19日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。期間のはじめは、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。その後は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	40	30	30
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	40	40	20
2週目	気温	30	40	30
3～4週目	気温	30	40	30

【予報の対象期間】

1か月 : 7月20日(土)～8月19日(月)

1週目 : 7月20日(土)～7月26日(金)

2週目 : 7月27日(土)～8月2日(金)

3～4週目 : 8月3日(土)～8月16日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--